

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

現代女性作家とメディア表象をめぐる日中間横断研究
—トランスナショナル・フェミニズムの視座から—

氏 名

陳 晨

論 文 内 容 の 要 旨

本論は、トランスナショナル・フェミニズムという視座から第2派フェミニズム運動以降のポストフェミニズムと呼ばれる時代を経験する今日の若い世代の女性たちの、日本そして中国社会で置かれている状況を同時代のメディア文化と文学作品から考察し、フェミニズムの現代的な意義と必要性を横断的に検討するものである。とりわけ、2000年代以降の「女性作家」の作品と、彼女たちを取り巻く外部で生産された同時代のメディア事象としての文化テクストに目を向けて、90年代以来、アカデミズムにおいて多くなされてきたジェンダー分析を試みるフェミニズム批評の中の一実践として本論を位置付けたい。

「個人的なことは政治的なことである」という言葉で知られるように、フェミニズムがラディカルな社会制度の変革を求める社会運動の一形式から我々の生／性に対する認識そのものを問い直す理論へ本格的に転換し始めたのは、第2波フェミニズム運動以降のことである。1980年代から90年代にかけて、国境を越えて多くの国で教育と雇用の機会、私的空間やメディア表象における性差別の是正の目標はある程度達成されていった。そうしたフェミニズムの運動によって得られたものが多くある一方で、フェミニズムの内部においても、人種／民族／階級／セクシュアリティなどの多様な差異について考える必要があるという声が「ブラックフェミニズム」・「第三世界フェミニズム」などの台頭とともに上がってきている。

本論では、このような女性たちとフェミニズムを取り巻く今日的な状況を踏まえて、ポストフェミニズム時代におけるフェミニズムの理論枠組を念頭に置きながら、2000年代以降の日本と中国における若い世代の「女性作家」の文学テクストと彼女たちを取り巻く外部で生産された同時代のメディア事象としての文化テクストを対象としたジェンダー分析を行い、地域横断的な考察を試みる。具体的な考察の対象として取り上げるのは、日本の「女子」文化や「腐女子」趣味の東アジア的な展開、同時期の日本と中国の文壇でそれぞれ観察できる「変容」、すなわち権威的な文学賞の受賞者の若

年化と若手女性作家の活躍である。そのほか、日本に嫁いだ「中国人嫁」や「在日台湾人」女性が描かれる日本語文学などのような一国主義的に議論することができなくなってきた今日の文化事象と文学テキストである。そして考察を通して、次の二つの課題を果たしたい。

第一に、主体はジェンダーだけではなく様々な差異によって重層的に構成されていることが自明のことになってきた今日に描かれた若手女性作家の作品における自己言及的な言説、また基本的に女性が主体的に関わって生産されたメディア表象の中でジェンダーがどのように多様かつ越境的に機能しているのかについて、女性が置かれている位置と表現者としての個の振る舞いの間に共通して見られる「ずれ」に目を向けること、そして上の世代の女性作家の作品や同世代の男性表現者との比較を行うことでその一枚岩ではないあり方の具体的記述を試みるのである。特に指摘したいのは、ジェンダーというメタファーは依然として重要な役割を果たしているということ、またジェンダーに対する読解の方向性は多様化しつつあるということである。

第二に、本論では、アジア的同時代性に目を向けるということである。日本という社会空間で行った考察と同時期の中国における文学／文化現象との比較を行う。比較の目的はそれぞれの作家の経歴や文学表現における形式上の相違点また共通点を見出すことばかりではなく、またどちらの方が優れているあるいは望ましいという主張のためではない。日中比較の作業をこれまで主流を形成してきた欧米に視線を合わせた研究の中で見落とされてきたアジア的フェミニズム批評の実践の検討として意識しつつ、本論で指摘したい重要なことは、重層的に形成されてきた複数の経験＝切り裂かれた経験の共同性を接合して考える際の具体的な経路とその実現可能性である。内面を見つめながら「外」へと世界が広がっていく表現を比較という作業を通してテキストから見つけ出すことを、そのための妥当な方向性として示したい。

では、具体的な内容を示しておこう。本論は4部構成となる。それぞれにおいて2000年代から現在に至る文学及びメディア事象としての文化テキストを分析対象としている。

第Ⅰ部「メディア文化領域におけるジェンダー」では、ポストフェミニズムの時代を生きる女性たちが置かれている状況とその文脈の中で生産されたメディア表象やポピュラー文化についてのジェンダー分析を行う。第1章「今日のポピュラー文化とジェンダー—2000年代における日本「～女子」文化の諸相—」では、まず、フェミニズム研究をめぐる近年の流れとその課題を説明する。「男女平等」が当然のようになってきた現在においてはもはやかつてのような「女性」カテゴリーによる共同体の成立が困難になってきた。そのような現実がある一方で、女性によって主体的に形成された「女子～」、「～女子」現象が起きている。第1章では、それに対応するための新しい

理論としての第3波フェミニズムの視点を活かしながら今日の日本社会における女性たちの文化実践の特徴と問題点を明らかにする。第2章「メディア表象をクィアする—中国のネット文化とクィア実践から見る「抵抗」のメカニズム—」では、第1章を受けて、その結論を越境的に提示するために、ポストフェミニズム時代に中国でネット文化として生産された「屌丝」ブーム（男性間）と「腐女」（女性間）文化について考察を行う。本来卑俗な用語である「屌丝」が規範や上流階層に抵抗する用語として語り直されるプロセスを一種のクィア的实践として論じることを試みる。一方で、同時期にブーム化した「腐女」（「腐女子」の中国語表現）文化では、男性の身体と男性同士の身体接触が凝視の対象になることが実現されていて、そのことも従来の女性を客体化する男性中心的な表象体制に対する「抵抗」として捉えられると説明する。第2章では、新しい実践としての「屌丝」と「腐女」における相違に着目して、その相違を生み出した原因をジェンダーと重ね合わせることによって、「抵抗」の意味を再定位することを試みる。第I部の考察を通して、フェミニズム研究の中で重要視されてきたメディア文化やポピュラー文化をめぐる今日的なアプローチとその有効性を提示したい。

第II部「文学領域におけるジェンダー その（1）同時代批評と文壇」では、同時期の日中文壇に着目し、それぞれの国の若手女性作家たちをめぐる同時代言説を分析する。その上で、第I部でのメディア分析はそれが文学領域においては、どのように組み込まれているかについて応答とずれを指摘する。第3章「「女子」世代による語りの行方—斎藤美奈子の「女子小説」を手掛かりに—」では、「女子」文化が発生した時期の日本文壇に目を向けて、中でも「ダブル受賞」を代表とした若手女性作家の文壇デビューと活躍に焦点を当てて、同時代言説である斎藤美奈子の「女子小説」評を手掛かりに、文学作品における「女子」の語りのありようと行方について論じることを試みる。第4章「中国「80後美女作家」現象をみる—「身体」で書くことから多様な新しさへ—」では、同時期の中国の文壇に視線を移し、中国現代文学の変容を概観しながら、なかでも1980年代生まれの「80後^{バーリンホウ}」と呼ばれる若手作家たちの活躍に注目し、そのうちの女性作家が「80後美女作家」として表象されるという現象を考察する。第5章「文化翻訳としての「日本80後」文学—越境する『ひとり日和』から「青山七恵ブーム」へ—」では、同時期の日中文壇でそれぞれ観察できた文学的新しい変容—権威的な文学賞の受賞者の若年化また女性作家の活躍—は同時進行しているばかりではなく、越境的に響き合いながらトランスナショナルな展開を見せているということに焦点を当てて、中国における「日本80後女性作家」シリーズの翻訳を考察することを通して論じることとする。

第III部「文学領域におけるジェンダー その（2）テキストの比較」では、ポスト

フェミニズムと呼ばれる時代を経験する若い世代の女性であるという当事者としての日本の「女子」世代と中国の「80 後」世代の女性作家たちに集中して、彼女たちによって描かれる等身大の文学作品を取り上げながら具体的な比較分析を行う。第 6 章「〈変異する〉セックスの叙述—金原ひとみ『蛇にピアス』と春樹『北京ドール』論—」では、共に女性の語り手による異性愛をテーマにした作品として書かれた金原ひとみの『蛇にピアス』と春樹の『北京ドール』を取り上げる。二作に描かれる「セックス」の叙述に焦点を当てて、女性作家による身体的経験の語りがいかに変容したかについてジャンルや言語、国境を越境する視点から明らかにすることを試みる。第 7 章「書く少女と書かれる少女—綿矢りさ『ひらいて』と張悦然「黒猫は眠らない」論—」では、フェミニズム批評の中で重要なメタファーとして語られ続けてきた、「少女」をめぐる言説の系譜を踏まえつつ、現在の「少女」が語られている文脈を問う方向で、綿矢りさの『ひらいて』と張悦然の「黒猫は眠らない」を取り上げる。ステレオタイプの少女像がそれぞれのテキストにおいて様々なずらしを通して「私」の物語として語り直されていることを指摘しつつ、そのような表現のフェミニズムやジェンダー批評的なスタイルとの距離について考える。第 8 章「描き続けられる「身体」—金原ひとみ『マザーズ』に集中して読む—」では、女性作家の自己表象について文学史的に検証しながら、その中で、「セックス」・「出産」・「育児」などのような、身体を巻き込んだ形で語られてきた経験が、現在のジェンダー制度といかなる拮抗状態から立ち上がってきたか、またそれが「書く」という行為を通じていかなる批評力を生むかについて身体をテーマに小説を書き続けている金原ひとみの『マザーズ』を取り上げて論じる。第Ⅲ部における日中比較文学論はジェンダーの現在における「重層的」かつ「複合的」なあり方をトランスナショナルな視点から提示するという方向へ向かって展開していきたい。

第Ⅳ部「越境する物語におけるジェンダー」では、語る主体がジェンダーだけではなく、「外国人」・「在日」などのナショナリティを中心としたアイデンティティを同時に抱えざるをえない「女性」である作品の分析に進みたい。取り上げたのは共に「外国人・女性」を当事者の視点から書くことを選択した女性作家である楊逸の『ワンちゃん』と温又柔の「好去好来歌」、「母のくに」である。第 9 章「共感を「拒否」することの倫理—楊逸『ワンちゃん』を読む—」では、「中国人」・「女性」・「外人嫁」という複数のアイデンティティを有する「ワンちゃん」は奇妙な能動性ととも誰に対しても一方通行的な同情を示す人物として描かれており、読み手にとってある種の読みにくさ=共感しえないものとなっている。第 9 章では、その読みにくさを容易に読まれてしまうのを拒否するがゆえに生じたものであると読みつつ、当事者性の揺らぎとの重なりを確認する。第 10 章「受け継がれる問題としてのジェンダー—温又柔「好

去好来歌」、「母のくに」を読む―」では、「ワンちゃん」の次世代の視点人物を等身大の視点から描く温又柔の「好去好来歌」（2009）、「母のくに」（2011）を取り上げる。現在の「女性」というカテゴリーをめぐる重層的なあり方を示すテキストとして世代間にある差異に合わせて、分析してみたい。

第Ⅰ部から第Ⅳ部に渡って展開していく作品とメディア表象ごとの読解＝議論はもとより、テキストの生成およびメディア表象の変化の軌跡を指摘しつつ、女性という主体がどのような文脈のなかで作られていくのか、そのなかでジェンダーをどのように巻き込んで再配置・語り直しがされていくのか、これらの問いかけに対してフェミニズムの理論枠組からはいかに応答的に論じれば良いかという今日のフェミニズムをめぐる課題をトランスナショナルな展開を通して提示したい。そして冒頭で提示したフェミニズムの「行き詰まり」に歯止めをかける議論としたい。